

ふるさと、風

第72号 (2012年5月)

風に吹かれて (51)

白井啓治

『一陽来復 表裏一体 眺むればみな風流』

当会報も今月号でまる6年、72号となった。振り返ればあつという間、春の夜の夢の如し、と言いたい所ではあるが、どうしてどうして正直言つて会員皆大変な労力ではあつた。

個人的にはあるが最近こんな風に思っている。「歴史の里いしおか」と言うのはもう止めにしよう、と。「文化創造の里いしおか」と、大いなる皮肉をもって呼びたいと思つている。

歴史の里であるならば当然文化の里でもある筈なのだが、単なるキャッチフレーズの歴史の里だから、そこには文化という風の全く吹かない里である。それだからこそ当風の会では「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」を掲げて会報の発行を始めたのであつた。

先月号にも少し書いたので重複するかもしれないが、6年の締めくくりに改めて歴史・文化について考えてみたいと思う。

歴史というのは元もとは統計学としての暦を作るための記録を意味するものであつた。暦を作るのだから、事を間違ひなく正確に記録するものなのであるが、次第に事の記録そのものが独り歩き

を始めて、暦のための記録ではなく、自己顕示するための捏造記録とか体制維持のための捏造記録になって行つた。それが神話とか伝説といつた体制維持を正当化するための物語になって行つたのである。勿論、神話・伝説には生活の知恵を伝承する、というDNA的な純粋な物語もある。

だが、歴史書といった記録は、歴史の本来の意義から逸脱し、体制維持の嘘物語へと変わつていったものが多いといえる。中には歴史物語、歴史書とは全て嘘とまで断言する人さえもいる。

確かに、日本最古の歴史物語と言われている古事記などはその例の典型であると言つても間違ひはない。ただし古事記の有している歴史や文化遺産としての価値については別の問題ではある。

この歴史の里での歴史認識はと眺めてみると「歴史とは自分達の優位を自慢するための道具」だと思ひ違いをしている人までいるのである。些か言い過ぎの感もあるが遠からずである。

歴史とは何かと問われれば、歴史とは正しい事実の記録である、と定義することが出来る。記録とは文字だけではなく遺跡など時の事実を証明できるもの、という意味である。

事実としての歴史が何故重要であり必要なのかといえ、人のくらしの将来を予測し仮説設定するために不可欠な統計だから、ということが出来る

る。勿論、生物の進化という側面から見ても統計学としての歴史は重大なもので、外界の刺激に対応して進化するためには、生条件としての歴史の記録は何らかの形で留めておかねばならないものである。生条件としての歴史が何らかの形で記憶されていなかったり、その時の勝手な都合で事実を捏造した記録であれば、進化はあり得ないし、生条件が少しでも変動すれば、その種は滅んでしまう。

ふるさと風の文庫新刊案内

◎ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の作品が全集となりました。今回は第1～6巻が発売されました。(各巻1200円)

(歴史の里石岡とは言われながら、多くの歴史・文化が忘れさられていく中で、伝え残していかなければならない歴史・文化を、独自の打田史学の目をもって改めて見つめなおした作品集です)

◎兼平ちえこのふるさと散歩「歴史の里いしおかめぐり」(1200円)

(ふるさと石岡の絵散歩文庫。東日本大震災の被害に合う前の、貴重な石岡の史跡の絵が満載です)

※ギター文化館および街角情報センターにて発売しております。

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

つまり生物における歴史というのは、生活動そのものということができる。だから歴史には嘘や捏造は、本来ありえないのである。嘘のない事実だから歴史なのである。

この考えからわがふる里を定義すると歴史の里であるのだから「嘘のない里」という事になるのであるが、果たして真実は…？

では次なる「文化とは何か」であるが、この言葉ほど漠とした言葉はないだろうと思う。憲法にも日本人は皆「文化的生活を営む権利を有する」などと書かれてあるのだが、この文化的を正確に理解している人は少ない。法律家ですら正しく(?)は定義できる人は少ないであろう。

まあ、言葉としては厳に存在し、人間にとって重大な意味を持つ言葉であることはなんとなくわかるのではあるが、という程度の言葉ではないだろうか。

ならばと辞書を引いてみるともつとわからなくなってくる。広辞苑によると、文化とは「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果で文明とほぼ同義に用いられることが多い。西洋では、人間の精神的生活にかかわるものを文化という」とある。なあんだ、なんだった良いんだ、と思ってしまう、ある意味便利な言葉だといえる。

ことばとして存在し、それを表現用語として用いるためには、確たる定義が必要なのであるが実に漠としている。しかし、知識階級やインテリを自称する人たち、更には政治家、役人、教師たちはこの「文化」なる言葉の漠たるところが好きなようで頻繁に使っている。

そのためにと言ったら失礼になるかも知れないが、恰好だけ良くて中身の無い言葉のようになっ

てしまった感が否めない。文化人などと言われたこともあった小生にとつては些か恨めしく思ったりする。

曖昧でどうでもいいように思われてしまう「文化」という言葉であるが、実は人間にとつて非常に重要な意味を持つ言葉なのである。文化というのは人の暮らしそのものをいう言葉で、決してファッション的修飾語として用いられて良い言葉ではないのである。辛辣に言わせてもらえば、安物のネクタイであつてもぶら下げていればどこに入っても失礼はないと考える政治家、役人、教師達には理解の届かない言葉だといつても過言ではないだろう。

昨今漸く「文化力が未来を作り人を作る」という事が言われるようになってきた。文化とは人の暮らしそのものであるといったが、その通りで、文化というのは歴史と一体にあり、歴史の中に生まれた既成を打ち破り、明日を構築していく力なのである。そうした力を持つことから、精神的生括にかかわる言葉と言われ、定義されているのである。文化力とは歴史の中に存在するものであることから、伝えられてきた人知に対してこびりつく錆を洗い流すという力でもある。文化力という網に載せられて塵や錆等を洗い流して真に輝きのあるものを不変の輝きにとどめて残し伝えることが出来るのである。

だから文化という最も分かり易い芸能・芸術的な世界だけをみてしまい、それが現在の自分の生活において重大な役割を果たしていることを示す言葉であることと理解することを難しくさせているといえる。文化とは有形無形の生活の知恵、暮らしの知恵と考え大切にしたものである。

茨城の縄文語地名5

鈴木健

筑波

ツクバ=ツキデル先

語源

「平野の尽(ツ)き果(ハ)てるところに、秀麗な姿をみせるこの山を、人びとは親しみを込めて「尽端(ツクハ)の山と呼んでいた。」とは、著名な学者の言葉であるが、多くの人たちは、その情緒的な言い回しに何の抵抗もなく納得するに違いない。しかし、地元では筑波をそのようには見えない。この発想はよそ者か中央官僚の感覚である。同じような立ち位置で、正岡子規も「赤トンボ 筑波に雲はなかりけり」と詠んでいた。また、よくあることだが、ある地名説を出す、その説はほかの同じ地名にはあてはまらないから成り立たない、という得意げな批判?がはねかえってくる。地名とは本来地元の人たちの生業や生活の中から生まれるもので、その場所を共通に認識できる目印となるような名前がつけられた。したがって、小生活集団がつける小地名が基本であったことは、近隣の小字がしばしば同名であることにも表れている。典型は北海道南部の海岸沿いに小河川ごとに軒並み並ぶメナ(次頁参照)という地名だ。同じ地名がこんなに並んでどう区別するのだという疑問がおこるが、隣のメナは隣で、自分たちのメナとは関係がない。

さて、地元で狩りをしていた人たちは目印としたツクバをどう呼んだかということになるが、おそらく「先のとんがり」と呼んでいたのではなからうか。それは縄文語で【tuk 出る、出ている】【pa先】である。麓でもそれでわかるし、山中のどこからでも、頂上の突き出ている先だけはよく

見える。

転音 tukpa→tukuba

足尾 アシオ⇨反対側

語源 筑波山から北に続く山並みで一番高いのが

北端の加波山(709²)、次がその手前の足尾山(628²)である。『常陸国風土記 新治郡』に、「郡(コホリ)より東五十里に笠間の村あり、越え通ふ道路(ミチ)を葦穂山(アシホヤマ)と称(イ)ふ。」とある。郡は新治郡の郡役所(→R新治駅北、筑西市古郡が遺跡地)、笠間の村は現・笠間市。一里は535²。葦穂山は今の足尾山かと思われるが、そこを「越え通ふ道路」は足尾山と加波山の間的一本杉峠(425²)を通る。しかも、笠間へ行くにはかなりの回り道だ。それより、加波山の北麓、現・国道50号を通るほうが、勾配も少なく、近道である。さらに、蒲山と書かれたという加波山は標高もあり、古来山岳宗教のメッカといわれながらも、古文書には全く姿を見せることがなかったが、葦穂山はこの常陸国風土記はじめ万葉集やその後の歌にも取り上げられている。となると、加波山が、あるいは足尾山に加波山を含めて、葦穂山ではなかったかと思われてくる。その葦穂山を詠んだ歌に、「筑波ねにそかひに見ゆるあしほやまあしかるとか(悪しかる筈)もさね見へなくに」(『万葉集』東歌)があるが、その後も、「あしほ山やます心はつくはねのそかひにたにもみへてなき頃」(『建保百首定家』、「あしほ山花さきぬらんつくはねのそかひにみればくもそたなひく」(『硯在六帖』行家)と、「葦穂山」(筑波嶺に／＼のそかひに見……)が続く。古語辞典によれば、「そかひ」は、①背向かい、背中合わ

せ、②うしろの方向という意味とのこと。葦穂山は筑波山と①「背中合わせ」であり、②「うしろの方向」にあった。なぜ歌人たちは、このようにしつつくそれを言うのだろうか。もしかしたら、意味の見えないアシホの語源がかかわっているのではなからうか。ということ、アイヌ語(縄文語)に当たると、[aso 反対側、反対側の座]があった。北半球では南が前・表、北が後・裏である。まさしく葦穂山は主峰筑波山の反対側⇨背中合わせ、うしろ側である。今でもこの地域一帯を裏筑波と呼んでいるように、古くは後ろ山と(う)ことで、aso⇨so⇨syo(例・磯人→イシエト)で、aso⇨asyo⇨asio⇨asio⇨asio。それは足尾・加波山の総称ではなかったか。加波山のことだ、足尾山のことだと、認識できるような具体的な地名を作ることが困難だったなかで生まれた呼び名であろう。試みに、いま加波山と足尾山とを識別できるような具体的な名前をつけよといわれても人は戸惑うのではなからうか。

一方、中世に修験道の霊場として有名だった加波山は、「モトノ俗言ニハカンバと云ヒシト見エタリ、カンバハ神庭ナルベシ、コノ山モトハ葦穂山ノ内ナルガ、神社ノ在所ナル故ニ、神庭ト云ヒシガ、遂ニハ一山の称トモナルナルベシ」(中山信名『常陸国誌』1830年)と、神庭(カンバ)に由来するといふ。それは発音を生かしながらも、筑波の山並みに加わるということで、加波と表記するようになったのかと思われる。このように、二山のうちの加波山だけが後に切り離されて、固有の山名をつけられたので、葦穂の残った部分が今のは足尾となったのか。

転音 aso→asyo→asio→ashio→asio

麻生 アソウ⇨断崖絶壁

所在・語源 アシオに発音の似たアソウがある。

『常陸国風土記 行方郡』に、「麻生(アサウ)の里あり。古昔(イニシ)へ、麻、潜水(サ)の涯(ミギ)に生(ヘ)り。」とあるが、アイヌ語(縄文語)に、[assou: 断崖絶壁⇨as立っているso床面(ori)いろ]。その子音語尾消去母音化、assou:⇨o⇨u、asou⇨分割単母音化 asahu。中世の麻生城址は行方台地の縁にあり、付近には沖積平野から切り立った崖が随所に見られる。九州の阿蘇山も中央火口壁あるいは往時のカルデラが断崖絶壁であったことから assou:⇨asoアソか。

転音 assou:→assou:→asou→asahu→asou

男女川・メナ 男女川⇨メナ⇨上流の枝川

語源・所在 「をの神(男体山)も許し給へり、女の神(女体山)もちひ給ひて」「を」とめをとこの往き

つどひ、かがふかがひ」(『万葉集』)、あるいは、「筑波峰のつどひにつまどひ」(『常陸国風土記』)など、筑波山は古来男女交歓の場として有名であった。そのような先入観のもとで、「つくばねの嶺より落つるみな川こひそつもりてふちとなりける」(『後撰集』陽成院(868~949))という和歌に接した後世の知識人は、強引にみなに男女を当て字した。恋ぞ積もりて淵となる川は男女の川だときめ、神社の脇を流れる沢がそれだとされてしまったのである。文字を知らない縄文系の在住民が、自分たちの言葉でミナノガワと呼んでいたのを男女川という文字で書かれるようになったのである。語源を調べるには「その、尊むところは、ひとえにその

辞(コトバ)にありて、異朝(※ここでは中国)のごとくその尊むところ文字にあらざ(『国郡名考』新井白石(1657~1725))が原則だ。男女川という文字を解釈するのではなく、ミナノガワという言葉から語源を求めなければならぬ。しかし、ミナがなにてあるかがわからないし、ほかにミナのつく地名も見当たらない。そこで、iとoの区別があまりないことがこの発音の特徴であったから、それをメナとみて調べると、神栖市筒井に目名・目名上、同市波崎にも目名があった。さらに、メナ・ポンメナ・目名・小目名・目名川・目名沢・女男(メナ)川・女那川などが、支流や源流の川名、あるいは川筋の地名として、北海道南部から東北地方北部にかけて四〇以上も分布していた。日本語で意味の採れないそれは、アイヌ語(縄文語)に【mena 上流の細い枝川】がある。陽成院が詠った「みなのか」は何であったか。それは「みなのか 恋そつもりてふちとなる」ということから、恋が淵となる前の川、恋の瀬川、恋瀬川。恋瀬川の語源もここにあったのであろう。そしてそのミナは【mena 上流の細い枝川】つまり「つくばねの嶺より落つる」方の川又川ということになる(本流の源流は板敷峠方面)。そのことは江戸時代にも「筑波山男女川より落水 一 恋瀬川 右同断(※漁労税なしの意)(1876)や「男女川は表川(※恋瀬川)のことなり」(1878)等々と書かれている。当初は恋瀬川の支流川又川がメナであった。やがてメナの意味がわからなくなり、発音もミナにかわり川全体の名となったということであろう。神栖市の目名は、縄文遺跡も点在している利根川左岸の海岸砂丘地帯に分布している。「郡役所の」東南の方、松の下に出泉(イツミ)あり、一、清く渟(タマリ)りて

太(ハナ)だ好(ヨ)し。」「(『常陸国風土記 鹿島郡』。ここからの細流、あるいは、同書に「寒田」と載る近くの「神の池」からの伏流の表出も考えられる。

【転音】 mena→mina

名馬里

ナメリ 冷泉の丘

語源・所在

メナ地名とともにナメが付く地名もある。有名なのが、高萩市の花貫川ダム上流にある名馬里(ナメリ)淵。あてられた漢字からまことしやかな語源が語られているが、アイヌ語(縄文語)では二つの語源が考えられる。一つは【nam 冷た】ある【mem 泉池、池、湧きつぼ】【ri 高くある】【iとこ】。消去開音節化、消去単母音化、namemeriナメリ 冷たい池が湧きつぼが上流にあるところ。または、【nan 冷たくある】【mem 泉池、池、湧きつぼ】【ri ひと続きである】【iとこ】。消去開音節化、消去単母音化、namemeriナメリ ひと続きの冷たい池が湧き出ているところとなる。石岡市付近では園部川を滑(ナメリ)川とも呼んだ。滑らかにして、転倒のおそれあるゆえの命名だと言うが、上流の同市柴間の「池の端」バス停の山際にある池、すなわち、前者のナメリが水源となっている。地元ではそのナメリへの当て字に苦労したのではなからうか。この川はたまたま旧新治・茨城郡の境界になった。郡(コオリ)の境界だからコオリ川。コオリに行里をあてて、その行を行方(次号掲載)の行と同様にナメと読めばナメリとなる。かくて、行里川という漢字名が誕生したか。町名の行里川地区にはその郡(コオリ)橋と行里川(ナメリガワ)橋とが隣接してかかっている。静岡県長泉町納米里(ナメリ)も、近く

で富士からの伏流水が地表に湧き出しているところであった。これは後者のナメリか。北茨城市華川町下津田にナメリ沢、大子町田野沢になめり川。ナメリとほぼ同じ意味でナメ namemeriがある。長野県小県郡長和町の男女(ナメ倉(※倉)もおそらく同類であろう。埼玉県滑川町を流れる滑(ナメ)川は池を水源とするという。日立市滑川町の滑川も同様だと聞いた記憶がある。また、ナメはマメに転音する(類例ナンバンキビマンナンキビ・ナンマイサママンマンサマ)。すると、高萩市秋山の豆田は【namem 冷泉】【taとこ】であった可能性がある。近くには高清水・清水川・冷水場の小字があるからだ。一方、大子町北富田に小字ナメリ石がある。これは滑りやすい滑らかな石であろう。千葉県勝浦市の行(ナメ)川はどうか。

岩手県の花巻市と雫石町の境に宮沢賢治の「ナメトコ山の熊」で有名なナメトコ山、八幡平市にナメトコ沢がある。これも【namem 冷たい池】【etoko その先(川)その水源(沼)その奥】。頭tok 凸出部】であろう。

【5音】 hammemeri→namemeri\ nammemiri→namemeri\ nammem→namem\ nammem ta→namemeta

暴走する文明

菅原茂美

近年、社会道義の荒廃はあまりにも酷すぎる。同時多発エゴで、利己主義満開のせい、桜はさつぱり、咲こうともしない(4月6日現在)。先月号で、最近社会不安をもたらした疎ましい

出来事を列記し、その背理を糺すとして、吠えまくった。A I J投資顧問会社事件など、良心のかけらも見られない。

そして社会的には、「絆」などという文字が踊りまくっているが、被災者の孤独死や孤立死が目立つ。避難した他県で福島ナンバーの車が『福島へ帰れ』などと落書きされたり、津波による瓦礫の処理を政府がいくら頼んでも、知らんふりの自治体が多数ある。自治体は応援しようとしても、一部の過激な住民による脅迫や、扇動的な反対運動に手を焼く。日本は地震列島なので、明日は我が身なのに、頼まれると、冷たい言葉で突っ返す。正に薄情列島だ。「絆」の字が泣く。

茨城県内に福島県富岡町から避難してきているSさん(71)の言葉が忘れられない。『絆と言うけれど、家族を引き裂かれ、親しい友人とも離れ離れで、何が絆なんでしょうかね。』

ボランティアなど、多額の私費を投じて、繰り返し奉仕している人も多数いるけど、大方の人々は、何の奉仕もしようとしない。それどころか、中途半端な科学知識で風評被害を煽り、産地の生産者を泣かせる。世の中に完璧などあるはずはない。自然界や医療でも、放射能は厳然として存在する。ゼロでなければイヤだというのなら、地球を脱出し、お伽の国にでも引越したらよかろう。そして更に許せないことは、避難した民家に空き巣に入る不屈き者もいる。世も廢れたものだ。日本は昔から儒教など寺小屋教育で、社会道徳は、かなり末端に浸透し、欧米人などからも、高く評価されていた。(幕末の頃、日本侵略を狙った欧米列強が、日本人の識字率の高さや、社会的に統治された体制を見て、到底、安易に侵略などできる国ではないと、早々に諦めたという話がある)

また今回、震災の極限状態でも、商店から食糧略奪などが起らず、世界から尊敬の念で受けとめられた。それなのに、瓦礫の処分に協力を拒み、痛みを分かち合おうとしない、社会道義の失墜には、ほとほと嫌気がさす。

* * * * *

考えてみれば、人類といえども、単なる自然の一部であり、特別の存在などでは決してないはず。野生の動物が、何らかのハズミで、体毛を失い、ミノムシの真似をして、なにやら、「布」の如きものを身にまとい、その日その日が何とか食べられれば、それでよし。今日の人類は、そのような生活から、わずか、1万年ほどしか経っていない。罅(ぬぐら)を定めず、狩猟採集の流浪の生活だった人類は、メソポタミアで始めて、有用な植物を栽培し、おとなしそうな動物を飼育し、定住を始めてからまだわずか1万年。悠久の進化の歴史の中で、1万年は、ほんの瞬時にすぎない。そんな短時間で、野生動物が、博愛心に満ちた、崇高な生物に進化するなど期待する方が無理。人間が博愛に満ちた、天使に近い、神の申し子など夢のまた夢。弱肉強食の野生の性質が、丸々残っていたとしても、ごく自然な話なのであろう。

それでも、狩猟採集の時代は、人口も非常に少なかったので、極端な侵略でもなければ、一応の縄張りにはきちんと守られ、余計な争いはなかったと思われる。その証拠は、縄文以前の人骨は、この日本列島で4000体も発掘されているが、骨に傷痕などほとんど見られない。しかしその後の弥生人の骨には、傷痕は多数見られるという。つまり、弥生人の殺し合いの習慣は、いつでも存在

したということ。ついでの話だが、縄文人には決してない結核による脊椎カリエス痕が、弥生人になると、多数出てくるという。即ち一定面積当たりの人口が増えれば、結核のような病気が増え、縄張りを争う戦いが、頻繁に見られるということなのであろう。一定面積当たりの動物の数が増えれば、皮膚病・胃潰瘍・肺炎など、外界にジカに接する部分の病気が増えるのが常識。

【メソポタミアで農耕が始まって、飢饉に備え、食糧を蓄えることができるようになると、大変人類は豊かになり、平和になるかというと実はその逆。むしろ、持てる者と持てない者との争いが始まり、略奪や戦いが頻繁に起こるようになる。狩猟採集時代は、分け合って仲良く暮らしていたものが、「蓄え」は争いの元となり、貧富の差は、争いの火種。人間の性(さが)の悲しさよ。】

それゆえ、私に言わせれば、諸悪の根源は「人口過剰」。現在70億人を養うには、地球が1個必要なのだそう。生き物はどんな生物でも、1個体あたりの占める空間は、食糧確保だけではなく、静かに休養するリラックスのための面積が必要である。密集して汚染した空気を吸うより、より新鮮な空気を吸って新陳代謝を潤克にしたい。安心して昼寝もできないような人口密度のため、自然と今日の人類のように、好戦的な、強欲な、自分さえよければよいとする「種としての性格」が定着していったのである。

それゆえ私は、今の千分の一が地球上の適正人口と言いたい。日本では縄文時代の人口は10万人と言われる。今の一億人から見れば千分の一である。これなら縄張り争いもほとんど起きず、平和な生活が保障されるであろう。茨城県に三千人。

石岡市に80人で4集落ぐらゐ。これなら、ケンカのしようもあるまい。お互いに接触を避け、平和に暮らす方が、ずっと気楽だ。そして婚姻については、自然と身についていた近親交配を避けるための、交流はあつたに違いない。

日本で残酷な戦ばかりの世の中になるのは、大陸の戦争難民である弥生人が、二千年ぐらゐ前に、一気に百万人も押し寄せてきてからの事である。大陸での戦争難民が、日本を舞台にして敗者復活戦ばかりをやっている。そして平穩に暮らしていた縄文人を侵略する。大和朝廷とかいう「イカサマ師」が、温厚な先住民の蝦夷を凌虐する。そんなことで日本の歴史書は、勝てば官軍。勝つた方に都合よく書かれ、敗者を「賊」として扱う。南北米大陸では、9千万人の先住民の9割を、白人どもが殺害したという。極悪非道だ。

古代人が、いかに戦争好きで、戦いに明け暮れていたかは、古代に建立された神社の守り本尊を見れば分かる。たとえば鹿島神宮の「武甕槌命（たけみかずちのみこと）」は「戦の神様」である。全国至る所、神社の守護神は軍神が多い。平和愛好民族であるなら、本来学問・芸術の守護神である「弁財天」でも祀るはずである。戦勝祈願として「戦の神」を祀るのが常識だったのであろう。

さて利己的なのは、動物だけではなく、植物だって、隣の植物と葉が重ならないよう、競って天を目指す。地中でも、他の根と競合しないよう、植物によっては根から毒素を分泌して他の種の植物を枯らそうとする。モミジの種など、プロペラ状の羽が付いていて、我が子がすぐそばに定着しないよう、できるだけ遠くへ種を飛ばそうとする。

* * * * *

地球に生命が誕生して、ほぼ40億年。そのうち30億年は単細胞時代である。海でプランクトンのような単細胞生物の遺体が沈澱し、長い年月をかけて現在の「原油」となった。「石炭」は、多細胞生物（10億年前に出現）となった動植物の遺体が、やはり地中深く沈澱し、地質年代の主に石炭紀（3.6、2.9億年前頃）の層で加圧・化学変化を受け、固形化し、現在にいたる。

生命の歴史をたどると、地球上では、これまでに、特にカンブリア紀以降5億年間に、全生物のほぼ90%が絶滅するような事件が5回も発生している。原因は火山噴火・小惑星衝突・気候変動などで、酸欠・有毒ガスの噴出や、煤煙が成層圏まで充満し、太陽光が十分に地上まで届かなかつたことなどによる。更には地軸のブレなどにより、極端な寒冷期や、温暖期を何度も繰り返し、生物種の盛衰は、極端に変貌した。

このように生物の絶滅事件が何度も起きているが、現在地球上に生きている「種」は、これらの難関を、進化により、耐過出来る体質を獲得した「優れ者」達だけである。環境の変化に堪えきれず、遺伝子変換できなかった生物種は、みな滅びて行った。それゆえ今生きている生物は、相当の「つわもの」であり、選ばれた優れ者である。

現在身の周りにある「つまらないもの」即ち、単なる虫けらや雑草と侮ると、とんでもない。ちとやそつとの環境変化など、ヘイチャラである。こんな単細胞のバクテリアが、どうしてこんなに優れた生存力を持つのか真に不思議である。そのよい例が、人間の浅智慧で、次から次と抗生物質を發明しても、バイキンどもは、すぐに耐性を獲得し、あざ笑うかのごとく、生き延びる。近代医

学が手を焼く「多剤耐性菌」である。

おそらく人類が滅亡するとすれば、強烈なバクテリアかウイルスの出現に、人類の智慧がついていけなくなった時であろう。取るに足らない愚か者とあざ笑っている、そんな奴に寝首をかかれる可能性がある。次世代の地球の覇者は、哺乳類でも爬虫類でもない。おそらく「バクテリア」であるに相違ない。大方の多細胞生物が滅んだ後、生き残ったバクテリアは、何億年もかけて、再び多細胞生物に進化し、雄と雌ができ、遺伝子の多様性により、環境の激変などに耐えうる種のみが生き残り、再び地球上を闊歩するに違いない。

そうは言っても太陽の寿命は、燃料を使い果たし、残りはそんなには長くはない。そして、あと23億年後にはお隣のアンドロメダ銀河と、わが天の川銀河は衝突するから、地球や太陽など、どこへ、どう吹っ飛ばされるか知れたものではない。

* * * * *

さて本論。文明の進化とはなんであろうか？人類はおよそ5000年前頃より、人口は加速度的に増加し、智慧も進化し、現在遺跡として残っている諸々のものを建造してきた。建造物だけではなく、芸術や文学、社会を運営するシステムなど格段の発展を遂げてきた。

万里の長城・ピラミッド・マヤ遺跡など、高度の知能により、石造文明は隆盛した。日本にも巨大な古墳や神社仏閣など多数存在する。

そして、私に言わせれば余計な社会システムとして、「株式市場」やら「金融商品」の開発など、止まるところを知らず、無制限と言えらるほど、発展しすぎた。誰かが膨大な利を得れば、誰かが、どん底の憂き目にあう。個人や国家が華々しく、

繁栄するかと思うと、一家心中や国家の破綻など、不平等極まりない。悪意に基づく、一部の者が、経済市場を操り、世界恐慌を生み出したりする。人類が考え出した悪魔のシステムである。

更には、以前にも書いたが「危険なオモチャ」を作り過ぎる。その最たるものが原子力発電所。

有限の化石燃料など使わず、温暖化ガスも出さず、人間が完璧にコントロールできれば、こんな優れたものはない。発電コストも非常に安い。核分裂のエネルギーだけでなく、核融合のエネルギーさえ実用化されつつある。しかし、その創出するエネルギーが巨大であればある程、完璧な制御が必要である。御用科学者により、捏造された安全神話で、行政府も立法府も、丸め込まれている。ところが人間のやることだから、いつも完璧を期すことはできず、これまで、世界のどこかで、巨大な事故が勃発してきた。原子力潜水艦が浮かび上がれなくなったりする。そして、事故というより、原爆製造に梶を切り曲げ、大陸間弾道弾など、大量破壊兵器へと結びついていく。宇宙開発では、気象衛星など平和的なものは少数で、軍事衛星で満員状態だ。中国など他の衛星を破壊する衛星の開発に余念がない。こんな危険なオモチャの開発競争はマッピラだ。文明の暴走だ。

たるところで起きたことなので、その地域に起きた、特異な現象とは言えないだろう。恐らく人類に備わった普遍的なものであり、これは人類の「本性」とも言えよう。

* * * * *

話を換え、繁栄の頂点にある現代文明とは、これまた何ものか？ どんなに高度の安全性が施されているといつても、人間が創った物質文明は、歴史上、必ず大きなトラブルが発生している。すぐ役立つものはすぐ壊れる。例えば今年、イギリスの豪華客船「タイタニック」号沈没から、丁度百年目。当時最も安全性を強化した科学の粋を結集した船だったのに。更に世界各地に起きた航空機事故・列車事故。そして、記憶も生々しい福島原発事故など。美浦の市川先生の言葉を借りれば「拝金の亡者ども」の犯した起こるべくして起きた最大級の事故だ。

真の科学者の声を聞かない、(是非(えせ)科学者やら、金の亡者ども)によつて捏造された安全神話により、今、どれだけ多くの人々が、地獄道を歩まされていることか。住み慣れた土地を追われ、学校・会社・隣近所を失い、全く個々ばらばらに分散させられた。そして、2000年の三宅島の自然災害では、島民が帰還するまで4年5カ月であつたが、今度の福島原発事故は、所によつては、全く帰るめどが立たない。チェルノブイリに優るとも劣らぬ最悪の事態だ。

同じく、事故とは言わなくてもかもしれないが、工業生産などで起きた環境汚染問題。フロンガスにより、オゾン層が破壊され、地上に有害紫外線がストレートで届き、DNAを破壊する。人工衛星やその残骸が天空に満ち、猛烈なスピードで飛び

交い、時により地上に落下してくる。運が悪ければとんでもない災難にあう。水俣病やイタイイタイ病は歴史上最大級の悲劇である。要らざる水門を設け、干拓して農地を増やすが、農地は有り余つて、耕作放棄面積は莫大なものである。食糧自給率40%など、政治の怠慢そのもの。ダム工事による村落の水没。コンクリートによる河川堤防により、魚が住めなくなり、また、海に有機物が流れなくなつて、サンゴや海藻が打撃を受け、アワビやカキなども取れなくなる。正に死の海だ。家電製品や自動車などの廃棄物処理が間に合わないのか、タイヤ等とともにいたるところに野積みされている。一体こんな状態は、智慧ある人間のやることか。各国政府は、経済成長こそ金科玉条。何が何でも成長路線を歩もうとする。環境を破壊し、資源を枯渇させ、経済が発展したとて、そこに何が残る？

人間の脳は暴走癖があり、どんなブレーキも機能しなくなることがある。日本の大東亜戦争突入など、今なら小学生が考えても無茶な話が、堂々とまかり通る。現在の日本も同じことで、歳入がないのに巨大な国債を発行して、ツケを子孫に残し、次から次と事業を拡大し、膨大な借金王国を築きあげてしまった。国益より省益優先。借りたものは必ず返さなければならぬ。返すあてもないのに、更に借金を増やす。公務員の数を減らし、給料を下げて、国会議員は、自分達の歳費はそのままでは、世間が通らない。衆参両院を一つにし、議員数を十分の一に減らし、歳費は日当制にして、諸々の手当てを全部廃止。それから物申すなら、公僕として認め、国政を預けてもよい。既得権にしがみつき、ただただ己の懐を肥やすだけの議員

なら、即刻やめてくれ！この非常事態なのに、与野党駆け引きだけで、審議は進まず、政局争いばかりでは、国民の堪忍袋は破裂寸前だ。

* * * * *

ではこんな状態から脱するにはどうすればよいか。それは、これまで私は何遍も書いてきたが、経済のスピードを緩めることだ。スローライフを取り入れることだ。暴走する文明にストップをかけることだ。自動車を荷馬車に換えろ！とまでは言わないが、何もかもスピード時代とする焦りから脱却することだ。私は中米の発展途上国で国際協力の仕事をしてきたが、ラテンアメリカの、のんびりしたあのスローライフには、よくよく驚かされた。バスが通る道で、母豚が寝ころんで子豚に乳を与えている。するとバスは、豚がどいてくれるまで動こうとはしない。乗客も決して文句を言わない。カリカリしているのは日本人だけだ。スローライフに徹する…これしかない。

国連などが、真剣になって文明の暴走にブレーキをかけないと、人類は自爆死する可能性が高くなる。各国とも、国民総生産（GNP）の成長競争に歯止めをかけなければ、資源は尽き、格差は拡大し、行き着く所は「戦争」。愚かな歴史を繰り返すのみ。現生人類の学名は「ホモ・サピエンス」。「智慧ある人」という意味だ。後世の子孫から軽蔑されないよう、今、我々は、叡智を結集して、GNPの縛りから脱却することだ。

ふるさと風の会6周年記念展

「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」を掲げ、自分達の思いや考えを確りと表現していこうと立ち上げた「ふるさと風の会」も5月末でまる6周年となりました。毎月発行しております会報も通巻72号。振り向けば来し方の何と短くある、とは言われますが、どうしてどうして実に大変で長い時間と距離でした。とても春の世の夢の如しとはいきません。

毎年、6月には兄妹グループである「劇団ことば座」の発信基地であるギター文化館での定期公演に合わせ、ふるさと風の会の「歩み展」を開いてきましたが、今年も6月15日（金）～17日（日）（10時～14:30）で風の会歩み展を行います。

兼平ちえこ & 打田昇三展

今回の歩み展では、兼平ちえこが会報に一年にわたり連載してきた石岡巡りに絵をつけた小冊子「歴史の里いしおかめぐり」の出版記念として、その原画展および冊子の即売会を行います。

また、歴史の里いしおかにまつわる歴史物語を独自の視点で見つめなおして書き綴ってきた、打田昇三作品を全集としてまとめた「打田昇三全集」（全6巻）も展示及び即売会を行います。

風のことは絵同好会展

絵手紙から出発し、風のことは絵という新しいジャンルを確立した兼平ちえこが指導する「ことは絵同好会」の皆さんの展示発表会も同時開催いたします。

自分たちの暮らすふる里をギター文化館で改めて見つめなおしてみませんか。

ふるさと風の会展（10:00～14:30）入場無料。ギター文化館 Tel 0299-46-2457)

皆様のおこしをお待ちいたしております。

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

歴史を見詰める事が好きだったが、古い文書に接する機会が出来たのは豊かなものを私に与えてくれた。昔の生活や人々の姿が見えてきて故郷との係わりや思いが深くなっている。

そこに輪をかける様に感傷的な物の考え方が強いか遠い昔と現実が重なる事がある。その人との出会いもそんな一つの現われ方であつたらうかと思う。

五年もの時間をかけて調査研究の発表の日が来たのは二年前の三月中半だった。私もこの中の一員というだけで緊張しながら、資料配りの役をしていた。知り合いは言葉をかけてくれた。知らない人にはこちらからの声かけを心がけた。その中に今迄合ったこともない人にも拘わらず「あらあの人ではないかしら…」と感ずる人がいた。何故か懐かしい人だった。目で追つたが入ってくる人への対応で見失つてしまった。左程広い会場でもないのに帰り時も姿は目に止まらなかった。「遠い昔の姉さんが好きだった人に似ていた」と直感した一瞬だった。

旧四月八日が近づくにつれ、なにか切なかつた。もし私が考えているような人なら、あの場所を知っている筈だ。いや関係ない人かも…。いや私の血が騒いだのだから間違いない。その術を知ることもなく時が流れた。この春はとても咳が出た。古い書物の中から吸い込んだ菌にでも冒されたか随分長く咳が続いて咳き込むと苦しかったが、この位で病気になるかと思ふかと強気で過ごした。その気持ちは赤児を抱いて向う岸に渡つた遠い昔の姉さん、当時五十才。それから赤児が一人前に

なる迄には今の私と同じ年になっていた筈だ。負けずに生きていたに違いないと思うと、病気になるまでやらない。まだまだやる事があるのだと弱気を蹴つた私だった。

鬼子母神のご縁日のお参りの後、縄とき地蔵へお参りする為坂を下りた。旧四月八日は毎年そうしている。ここは遠い昔姉さんが流人と合つた場所だから、来ないではいけない所なのだ。遠い昔その頃に、建ち並んでいた稗蔵も今はない。人の賑わいもない。波が舟板を叩く音も聞こえない。魚とる舟も、運送舟もない。三百年前の面影は、稗蔵川岸、稗蔵、籠ぬけ地蔵等の名称に残っているだけだ。コンクリートの堤防が目前の流れを隠してしまつて、車が走り去る道路となつた。この地の様が変わつていても、代々受け継がれた血の中に私を此処まで向かわせるものがあるのだと思う。だからこの間の人も此処へ来てくれるに違いない、と願ひながら歩いてきた。藤の淡い葉と花の色合いがとてもいい。え、この木は藤の枝をしつかり支えている。木の影から線香の煙が見えた。そこに展示会の時の人がお参りをしてきた。半分以上は願ひしていたことだが、不思議と満足に感動していた。挨拶の後、堤防で向う場を見ながら話をした。その人は「展示会をきつかけに、長年思

い続けていた籠ぬけ地蔵まで来ることが出来た。代々伝えられていた遠い昔の兄はどうしたのか知りたかつた」と言う。私も話をした。遠い昔の姉さんがここでお会いした人の後を追つて三十年後赤児を抱いて向う場へ行つたこと。私は向う場の方々のことも知つてゐること等、時の経つのも忘れていた。展示会の日に「ビービー」と感じたものと今の喜びはつながっていた。いつの間にか霞

が立ち込めて近い筈の向う場が包まれてしまつて、もう何も見えなくなつた。「来年の旧四月八日には向こうのお宅に伺いたい。体力の続く限り毎年来る積りだ」と。私の方へもいらしてください」とのことだった。その人は東の方へ帰つて行つた。姿が消えたようにも思へたが、話してもしたし、幻ではないと充たされた気持ちで送つた。明るい気持ちの反面咳は夏も止まらず、秋の入口まで長びいてやつと残暑が持ち去つてくれた。見えない所に病が潜んでいるのではないかという不安がない訳ではないが、来春を待つて日々をおくつた。

約束した一年後のご縁日は堂のお参りもそこそこ籠ぬけ地蔵へと走つた。一時間経つても来なかつた。十分、また十分と延し延しとうとう昼のチャイムがなつた。もう来ない。こうなつては一人で八木の縄とき地蔵まで走ろう。皐月の風は気持ちがいい。土手の草々も湖に影を置く台の木々も、若葉の出店、新緑のファッションショーの様、早苗と空を写す水田も和ませてくれる。心の中は来なかつた人を憶測しての不満と、伝えられなかつた話しの重荷を顔へ表して走り続けた。八木の堤防は三月の震災で長い箇所が痛んでいる。田の中の古い堤防を急いで、縄とき地蔵へ向かつた。地蔵さまの前には訪れた人の足跡が残つていて「どうぞ、お寄りください」という声があった。大井戸の見える所にある、こ薩張とした家で甘茶を頂きながら、今までの経緯など話した。「来年はあちらへも伺つてみましょう」と、間を取り持つ役目は私だと自信をもつて言つて別れた。干拓だ。堤防造りと流れ海は小さくなつて山崎の森も奥に閉じ込まつてしまつた感じだ。突然風が吹き出し、雨をよび雷がなつた。山沿いに行けば雷が落ちる

かもしれない。自転車はタイヤがあるから電気を通さないから大丈夫という話しを思い出し田の中を走ったが、光と音には生きた心地もしなかった。そんな中を三十分も走った。これは何としたことだ。封印された物を開いてしまったか…と、びしょぬれになって家に着いた。

その後は胸が痛むような感じがした。心臓のリズムが狂ったかとも悩んだ。思いを掛け過ぎるのはよくないよ、と体が言っているようだったが無視してみんな年が大きくなった、やれる時にやっておくんだと又何かに取りつかれたように動きはじめた。今度の縁日に向う場に行くとも、東の方へ行くともどちらにも対応出来るよう、水戸へ向かって東の湖の方の探索をすることにした。古い道を捜しながら、遠い道程には随分と時間を費やした。その地に立った時の達成感は充分疲れを癒してくれる所だった。私らの住んでいる地形に似ているが全く違った。堤防はなく葦原が豊かに続き、風をよび鳥たちが集う。湖と周辺の地が分断されていない。ここに住む人の生活もそうであるうか。それにしてもこの広い湖の西の方というだけしか分かっていないのだから捜すにも時間がかかる。今日は一先帰ることにした。葦原の続く西の里山の奥に夕陽が沈もうとしている。夕陽が一日の終りにすべてを紅に染めていく。そして空は七色に変化して静かに宵に入る。今夕陽を送った方向に家がある筈だ。さようなら、今度は捜しあてます。やがてこの里も紅葉の時期に入るだろう。結局星空を見ながら虫の音に励まされて古道を帰った。人力では時間がかかることは分かっていたも、その後も手掛かりの掴めないことが心残りだった。

晩秋から寒く今迄にないといわれた寒い冬に包まれた。寒気の長さは春の訪れおも遅くした。今年の三月には間がある。旧四月八日大分遅れる。初夏に入る。その人は来るのだろうか。不安もあるが今年には長い時間をかけてお互いを思っていた。三ヶ所の人間が一つに結びつく年だ。希望の辰年にしよう。決して夢物語でなく青春時代から兩岸へ寄せた熱い思いが現実と結びついたのだ。ところが今迄にない激痛が左足の甲と掌をおそった。又息を大きく吸うことが時々ある。右の目からよく涙が出る。老化現象だろうか。動き過ぎに一寸ブレーキをかけていこう。

一休みして旧四月八日を待とう。巡り合うことを静かに願っていこう。

石岡市民俗資料館

兼平ちえい

「歴史の里 いしおか」と謳われている石岡は茨城県のほぼ中央に位置し、西に筑波山、東に霞ヶ浦を望む風光明媚な気候も比較的温暖で住みやすく一一年以上前から生活の場としてひらけていた。

常陸風土記の丘に広がる宮平遺跡等、旧石器、縄文時代から弥生時代にいたる数多くの遺跡が発見されている。舟塚山古墳群を中心とした古墳時代、飛鳥時代には現在の茨城県のほとんどが常陸国として誕生し、この石岡の地に国府がおかれた。更に奈良、平安時代には国衙をはじめ、国分僧寺、国分尼寺が建立された。又この時代に鉄製品を中心に製造していた官営工房が営まれ、茨城県最古の都市として大いに繁栄した。

そして武士の時代に入り鎌倉、室町時代には府中石岡城、府中城、三村城等…：諸々な城が築かれた。やがて徳川の世になると石岡の地には、府中平村松平藩として陣屋がおかれた。そして二百余年続いた華やかな江戸時代が終わりを告げると「散切り(さんぎり・じゃんぎり)頭を叩いてみれば文明開化の音がする」と世の中は人知が開け進歩しながら明治の時代に入り、大正、昭和の時代へと石岡は商業、醸造、製糸などの産業都市として発展していく。

こうした時代時代の暮しの営みの中で生みだされた遺跡や遺物が現代の私達に未来へのよすがとして語りかけてくる。

石岡市民俗資料館は、常陸国衙跡、府中城跡、そして明治以後は教育施設が建設され、石岡の枢要として、重層的に担ってきた地である、現在の石岡小学校敷地内にある。石岡小学校開設百周年記念事業として昭和四十八年に完成された。

展示品としては、茨城廃寺跡(飛鳥時代、常陸国衙跡、国分僧寺跡(復元模型あり)、国分尼寺跡、官営工房跡(鹿の子遺跡として復元模型あり)等発掘調査で発見された出土品や市民から寄贈された商都として栄えた醤油や酒造りに使われた用具、農機具、生活用具や諸資料等展示されている。

昨年(二十三年)からこの資料館の当番のお手伝いをする事になり、歴史に興味のある方のご来館なので、ご意見をいただいたり、勉強させて頂いている。金、土、日曜日と祭日と少ない開館にもかかわらず県外からは四月だけでも東京は四区一市から、栃木、神奈川、福井県越前市、千葉、埼玉、他県内ではつくば市、水戸、土浦、日立、真壁と歴史を深める人の来館が見られた。

ここで来館者の感想をご紹介します。

・竜ヶ崎市からの三十九歳男の方：石岡は歴史を大事にしてないですね」

・東京七十代男の方：東京で石岡の登録文化財についてパンフレットで知り尋ねたが、それよりもっと古い歴史があったんですね」

・常陸太田市出身、鹿の子にお住まい男の方：先人からの伝言や歴史を大切にしなければ街は滅びていきますよ」

・石岡の街を始めて歩きました、懐かしい雰囲気です、観光にもう少し力を入れてもよいかもしれません。

・五十代東京からバイクでの女性：夕べ石岡に泊まり、民俗資料館への案内板が見当たらず困っていたところ市民の方が地面に小枝で丁寧に書いて教えてくれました。その親切さに感激しました。

・等など。どうぞ市民の皆さんも石岡の歴史に触れ先人からのメッセージに耳を傾けてみては如何でしょうか。

そして尋ねられて、お答え出来たら観光に一役、石岡の歴史を伝えることになりませう。

月に二回広報いしおか「時の記憶」で発掘調査での出土品や民具など文化財の紹介がなされていますが「百聞は一見に如かず」是非是非特別企画展などで実物の公開を願いたいものです。どんな名著よりもどんなに流暢で実のある説明よりも、歴史に興味をいだけない方にも、心打つことにはあります。

ここで市内の小学三、四年生の民俗資料館を見学してのガイド者への礼状の一部をご紹介します。よう。ガイド者にとってうれしことが昨年十一月

から続きました。

地元の次代を背負う子供達の見学の激増でした。

○十二月九日は昔の道具などを見学させていただきました。ありがとうございます。私は昔のことが良く知らなく、どんな道具を使つてすごしたりしていたのかしらなかったです。でも民俗資料館で教えていねいに教えてくれました。教えてもらったことを社会の勉強に生かしていきたいです。どうもありがとうございます。

○みなさんの説明が上手でとてもわかりやすかったです。昔のせんたくとごはんは、女の人の仕事とわかつてびっくりしました。この民俗資料館をずっと守ってってください。

○このあいだは見学させていただいてありがとうございます。ごさいます、県庁は石岡にあつたとかじんや門は百八十年立っているなどいろいろなることを教えてくれてありがとうございます。

○先日はお世話になりました。わたしは昔の物についてきになつていたことが、たくさんありましたが、一番ビックリしたのは箱という箱ではパーにすると入るけど、グーにするとぬけないしくみにビックリしました。本当にありがとうございます。

子供さん達の目はダイヤより勝つていた。

・華舞台終わって 春雨仰ぐ ちえこ

島旅海旅

小林幸枝

旅の楽しさ、面白さと言うのは、自分の日常から離れ、日常とは違う体験が持てるという事にあ

2012 CONCERT SERIES

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。
魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。
どうぞよろしくお願ひいたします。

- 5月13日 國松竜二 ギターリサイタル
- 5月26日 マリオ鈴木 ギターリサイタル
- 5月27日 パパラサ フォルクローレコンサート
- 7月1日 高橋竹童【Trinity】津軽三味線コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、
また大好きな雑木林に一滴みの土を
分けてもらい、自分の風の声を「ふる
さとの風景」に唄ってみませんか。
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味
をお持ちの方、連絡をお待ちしていま
す。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

るのではないだろうか。私は、何でもいいから何処か知らない所に出かけることが好きだ。

旅と言うのを辞書に引いてみたら、自分の家から離れて何処かに行くこと、と出ていた。それで、そうかと納得できた。自分の家にいると、とても安心できるけれど毎日が同じことの繰り返しで、つまらない。気持ちも沈んでくる。旅行に出かけると全てが新鮮で気分も高揚してくる。

最近「島旅海旅」という事を知った。日本の島と海、そして文化、自然、人情に触れる旅行なのだという。その島旅海旅で特に私の気持ちが引かれるのが、：

- ・古代琉球ロマンを訪ねる伊平屋島、伊是名島
- ・癒しの時を刻む南北大島島
- ・南大東島

- ・硫黄島、黒島、竹島

…などである。

旅に出かけると気持ちが新鮮になるせいなのか、想像する舞にも良い影響を受けるように思う。

人生とは「時を旅すること」と言うそうだが、時ではなく矢張り自分の足で、知らない土地に出かけていくことが人生を豊かにしてくれると思う。

《特別企画》

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光（2・2）

そこで源頼光も興味を示し、年の離れた弟の頼信が元服した際に祝いの席へ橘頼経と伴廉平の二人を

呼んだ。酒宴半ばで、居並ぶ面々は廉平から適切なことを言われて一喜一憂した。占いは余見でしかないから「嘘」とは言わないが、橘頼経の話は出来過ぎていて。頼経が妻の不貞を知っていて「妻殺し」を正当化したのかも：気の毒なのは射殺されそうになった名馬である。その馬は、源頼光が藤原兼家に贈ったものを頼経が貰ったのであるから、殺意を持たれたことは不愉快である。馬が密告したのかどうか、祝の席でも頼光は機嫌が良くなかった。伴廉平に「面相を見てくれ！」と無愛想な顔で言った。一座の者たちは予言がどう出るのか、恐る恐る見つめていた。

廉平はそれを意識した訳ではないが、まず、元服した頼信少年の前に来て、その相を見てからおもむろに言った。「この君は一生の間に一度は軍旅の労があり、やがて古今未曾有の名譽を顕し給う：」成人した源頼信は「平忠常の乱」に遠征して苦勞をしたが、それが切っ掛けとなって武將としての名を顕す。予言のとおりではあるが、冷静に考えると武士の家に生まれれば誰でも生涯に一度や二度の「軍旅の勞」は当然であるし、何度か合戦していれば少しは手柄も立てられる。

それで、少しご機嫌の良くなった頼光の前に来た廉平は、不思議そうに首を傾げ（かしげ）てから、橘頼経を呼び止めて忠告したような具体的なことを言わず、慎重な言葉で「：今日から五日の中に喜びごとがあり、必ずや武名を天下に広め、末代の鑑と成らせ給う：」と答えた。列座の面々は橘頼経の話が頭にあるから、何となく肩すかしを喰らったような気分であった。それから三、四日が過ぎて、頼光の身辺には何の変化も起き無かったから、周りの連中は「：伴別当が適当なことを言うものよ！」と言ひ

合った。占いは競馬やパチンコと違って、その場合で結果が出るものではないと思うのだが：。

予言された五日目の昼過ぎに、頼光は仕事を休んで家に居た。普通の占いならば、その場で判断を出すであろう：それを五日もかけるのであれば特別なメニューなのかも知れない：他愛もないことを考えている中に、昼近くなって急に眠気を催した。「これはいかん！」眠っている間に占いの内容が示されたりしたのでは運を逃がす：何とかして睡魔を追い除けようとしたのだが叶わず、其の俛で深い眠りに落ちていった。

これからは、源頼光が夢の中で体験したことであるから、全体が「架空の物語」になる。通常は「一〇〇%の嘘」であるけれども、怪しい証拠物件が存在したことになっている。その鑑定結果は不明だが、一通り話だけは聞いて頂きたい：。

その頃に落下傘が在ったとは聞いていないが、夢の中で源頼光が空を見上げると、天から影の如くに降り立った美女が、部屋の外に畏まって控えていた。「そなたは誰か、何用あつて其処に参られた？」と尋ねると「我は楚（そ）の恭王の大夫（五位の家臣・側近の者・養由基が娘で名を椒花女（しょうかじよ）と申します：」と答えた。

椒花女が言うところによれば、父親の養由基は弓道を好み射芸の上達を願っていた。或る時に大聖文殊（だいせいもんじゅ）さつた（仏の知恵の象徴、一般には文殊菩薩）が養由に仮託して現れ「汝は我が化身であるから、三徳を教えん：」と、文殊が自分の眼のエネルギーから二筋の鎗矢を作ってくれた。これが「水破、兵波」である。

また中国の山西省は、黄河上流と古都・洛陽と首都・北京とに囲まれたような地域であり、その北東

部に位置する「五台山」は中国仏教の三大聖地の一つであつてチベット仏教の聖地でもある。その麓に頭が二つある大蛇が棲んでいて、何を勘違いしたのか「信樂慚愧（しんぎようさんぎ）信仰心と懺悔心：浄土教的表現」を絹の糸にして八尺五寸（二、六mほど）の弦に縫り、一張の弓に仕立てた。これが「雷上動」である。それを文殊菩薩がとりあげて、養由基に呉れた。

そして古代に経文などを鉄筆で記録した椰子科の多羅葉（たらよう）で直垂を織り、養由基に着せてくれたのである。さらに文殊菩薩はこの弓矢を使い柳の葉を的にして揺れる物を射る方法を伝授してくれた。養由基は教えられたとおりに、百歩を隔てた柳の葉を射てみるとこれが百発百中。やがて楚の国が晋（しん）国と戦つた際に、養由基はこれらの武器を用いて活躍した。その弓は楯を七枚も射抜く力があつた。

しかし歳月が流れ養由基も七百歳になつて、やつと死ぬ気になり、その時にこれらの武器を伝える人物が居ないから娘の椒花女に伝えた。椒花女も七百歳とまではいかないが、かなりの高齢になつてきた。どうしようかと迷つているときに、文殊菩薩が現れて「扶桑国（ふそうこく＝日本）に、源頼光という武士が居る。彼もまた、我が（文殊菩薩の）化身であり童名（わらべな）を文殊丸と言つた。是は仏縁のある証拠で、この者こそ我が養由基に授けし武器を伝うべき人物なり。急ぎ、彼の国に渡り授与すべし」とお告げがあつた。

そこでパスポートも持たずに日本へ来て目の前に品物を置いた次第である：椒花女はそれだけ言つと姿を消した。身体に羽は生えていなかった。：その瞬間に頼光も目が覚めて座敷を見回すと、其処には「水破」「兵破」「雷上動」のセット及び「多羅葉で

織つた直垂」が丁寧に置かれていたのである。誰かが買つて来た様子はない。

こういう物語は宗教と同じで一切の疑問、質問、探究心を捨てて、丸ごと信用しなければ成り立たないのだが「不思議発見！」が多すぎる。空から降つてきた椒花女は源頼光の夢に現れた女性であるから諦めるとして、文殊菩薩に見込まれたという養由基は楚の恭王の家臣と称した。「楚」は中国古代国家の「周」に服属した国で紀元前二二三年には滅亡しており、楚の歴代国王に「恭王」は居ない。養由基が文殊菩薩から教わつた弓遣いで戦つたという晋の国との戦争は紀元前六三三年のことである。そして八百年も生きていた養由基はなぜか一代の王にしか仕えていない。また仏教が中国に伝来したのは紀元前後と推定されており、大乘仏教により仏像が創造されたのもそれ以降であろうから、文殊菩薩が養由基と知り合うのが年代的に不自然である。多分、この話は日本の何処かで「源氏礼讃の嘘」として作られたのである。

夢から醒めた源頼光は伴別当廉平を呼び、様々な引き出物を与えた。そして夢で授けられた品物の中で名前が付いていなかった直垂に「はつともみじ」と名付け、これらを源氏直系の子孫に伝えて妖鬼を鎮め、強敵を倒す家宝としたのである。

どうでも良いような「嘘」を長々と書いて申し訳ないが、この嘘を丸々と信じて清和源氏頼光流の家系には、二振の剣プラス怪しい品々が「直系の証し」として伝えられていた。そこで、朝廷から陸奥守兼鎮守府將軍として、阿倍一族鎮庄のために東北行きを命じられた源頼義は、相手の弱みに付け込んで源氏直系の証拠品が自分の手に渡ることを任務受諾の条件として提示したのである。その場合に（誰でもそ

うするとは思うのだが）怪しい品物は避けて「二振りの剣」だけを要求した。

問題の宝？は、源頼光の死後に嫡男の頼国に伝えられた。此の人は武官から転じて宮内庁官僚を務め、近畿から西国の国司を歴任したとされる。頼国には大勢の男子が居た中で、なぜか伝来の家宝「怪しい三点」は多田姓にこたわつた四男の頼綱が相続した。先に述べたように密告者が出る家系である。そして頼義が望んだ剣は「舎弟（しゃてい）の頼基に譲られた」と前太平記が伝えている。一般に清和源氏の系図として流布している中に頼基の名は無いが、「姓氏録」には頼光の末子に頼基がいる。頼光さんも末子が可愛くて名刀を伝えた：と思えば話は合う。鑑定に出す訳ではないから大雑把に話を進めると、源頼義が奥州赴任の条件に出した「源氏の重宝・二振の名刀」を持つていた人物には、朝廷から命令が下つて「その剣を一族の頼義に渡しなさい」と言われた。源氏本流の証しであるから承知する筈がない。「ノー」と言える日本人の第一号として丁重にお断りした。頼義のほうは政府の足元を見て「剣が無ければ奥州行きはお断りする」と言つて横を向いた。困つた朝廷では後冷泉天皇が自ら名刀の持ち主に何度も頼み込み、やつと承知して貰つた。「鬼丸、蜘蛛斬り」を手に入れた頼義がコロツと態度を変えて奥州へ赴任して行つたことは言う迄もない。これ以来、清和源氏でも庶流であつた頼信の系統（頼朝に続く家系）が、一躍直系と看做されるようになったのである。

永承六年の夏に、源頼義は源氏一族の武士三十余騎、郎党（直属の家臣）数十騎を中心にした多くの軍勢を率いて大阪府の本拠地を発ち、都へ寄つてから任地へ出発した。本来は政府に謀反を企てた（と、いうこと）にされてしまった阿倍頼良の反乱を鎮める仕事で

あるから陸奥守と陸奥鎮守府の將軍を兼ねなければ任務は遂行出来ない筈である。しかし、この時点で、源頼義は「陸奥守」にしか任命されておらず「鎮守府將軍」に任命されたのは数年後のことである。当時の法律で権限の有る職務は兼ねることが出来なかったからであるが、それなのにまるで合戦に行くように大勢の軍人を連れて行く…全てが不可解である。

都を発った源氏の一行は先ず近江国に入り待ち受けていた佐々木一族の四百騎を加え美濃、尾張、三河、遠江から中山道經由で伊豆、駿河に来るまでも仲間入りした諸国の武士たちで人数も多くなった。前太平記は「一万余騎」としているが、「嘘」であろう。国司として赴任するのに一人人も連れて行ったのでは、県庁が幾つ有っても足りない。本拠地の鎌倉では留守役の武士や地元の武士団が集まってきた。朝廷が奥州行きを募集した際には聞こえない振りをした地方の武士たちも、仲間が多ければ負けることはないし、責任者でなければ失敗のリスクも少ないから「我も我も」と参加してきたのであつて伝えられるような「源氏の威光」でも「源頼義の名声」でもない。

鎌倉では任務達成を祈願するため、京都の石清水八幡宮から神様を勧請することにして場所選びを始めた。やがて其処に建てられたのが鎌倉の鶴が岡八幡宮であるが、争乱を鎮めに行くには一刻を争うから、周囲を歩き回って神社の場所を決めている暇はない。それらを考えると「陸奥国で阿倍頼良が反乱を起こした」というのは「嘘」で、陸奥国司の藤原登任と秋田城介の平重成とが個人的な妬みで阿倍頼良と喧嘩をして負けた、程度の事件が有ったのである。源頼義は、坂上田村麻呂の場合と同じように、本来は一般競争入札で決める仕事であるけれども少

し面倒なことがあつて応札する企業（武家）が無く、源氏組が頼まれて随意契約を結んだようなものであるから、京都で「葵祭り」に参加するぐらいの気持ちで陸奥国府へ向かった。先に述べたように陸奥守の内示を受けたときには相模守の任期が終わり京都か本拠地の摂津（大堰）に居たとするのが通説であるが、その間に常陸介になったとする説もある。東北への赴任以前の問題であるから、どうでも良いように思われるが、実はこのことが後に起こる「後三年の役」の発端に大きく関わってくる。石岡市史には「常陸国古代国司一覽」が収録されているけれども永承三年から二十数年間が抜けているから源頼義の常陸国府勤務が有ったかどうかは分からない。その頃は年金制度も無かったので問題にはならなかった。永承六年六月二十九日に鎌倉を発った源頼義の一行は多賀城の陸奥国府をめざしたのであるが、そのコースが重要になってくる。当時の東海道は現在の東名高速道辺りを抜けていたであろうから鎌倉から少し北上して本道に出れば終着駅・常陸国府（石岡）までは国司様専用道路として使える。多賀城へ行くには東山道に出なければならぬのだが下野国（栃木）の何処で乗り換えるか…。

源頼義が陸奥守に任命される前に常陸介として勤務していたと仮定すると、石岡駅に着いた途端に軍楽隊の演奏が鳴り渡り、後任の常陸介以下がお出迎えをして国府にご案内をした。常陸国は親王任国であるから常陸守は名目だけで存在せず、常陸介が事実上の国主になる。頼義は単に前任の国主であるだけでなく、朝廷から頼まれたような形で陸奥守として奥州へ行く高官であるから常陸国府では竜宮城の浦島太郎以上の接待をしたのである。その責任者が常陸大掾（国府の局長）職にあつた多氣（平）致幹（む

ねもと）なのだが、先に述べたように今回の騒動を起こした秋田城介の平重成は一族であり、然も自分で起こした事件を解決出来ずに常陸国へ逃げて来ている。此処は新任の陸奥守源頼義殿に事を穩便に済ませて頂き、出来れば重成に落ち度が無かつたような「歴史の嘘」を残して頂かなくてはならない。

多氣致幹は、国府庁舎での歓迎セレモニーが終つたあと「国府館では十分なおもてなしが出来ない」として筑波山の南麓にある自分の館へ頼義を案内して接待したのである。これは頼義が先に常陸介として勤務しており、致幹と顔見知りであつたから出来たことである。多氣館からは宇都宮街道經由で東山道につながる。記録には全く無いが、多分、接待の席には現地から逃げて来ていた前秋田城介の平重成も畏まつていて現地の状況を詳しくご報告したことであろう。なお、この重成について「余五將軍の三男」としているのは前太平記であるが、そうすると致幹との年代間隔が合わない。大掾系図は地方豪族（平氏分流）のものであるから人物名の誤伝が有るかも知れない。

源頼義は筑波山麓に一泊し、帰りにはまた宿泊すると約束して奥州へ向かい七月九日には多賀城に入った。事前に集めた情報ではある程度の抵抗を予想して、それなりの兵力を連れていたのだが陸奥国は平和そのものであり、常陸国府ほどでは無かつたが歓迎式典も行われて頼義は拍子ぬげがした。根が武士であるから、小競り合い程度の合戦が無いかと思つている時に都から使者が来た。其の使者が齎した知らせは、重病で危篤状態にあつた上東門院が奇跡的に病状を好転させ、元氣を取り戻したというので大々的な恩赦を行うという内容である。恩赦の範囲には、過ぐる日に陸奥守及び秋田城介との間に合戦

を惹き起こした奥州岩手六か郡の郡司・安倍頼良も入っている。

源氏御用達のような前太平記によれば、国主として赴任して来る源頼義を迎え撃つつもりで合戦の準備をしていた安倍頼良が、相手の武名の高さと率いて来る大軍の数に恐れて恭順の意を表したという。

これは「嘘」であろう。頼義は最初から喧嘩腰で来たかも知れないが、朝廷でも「暴走」を警戒して鎮守府將軍にはしなかった。陸奥守だけでは連れて来る武士も無制限という訳にはいかない。双方共に、それ相応の人数がいて疑心暗鬼で腹の探り合いはしていたか何のトラブルも起こらなかった筈である。そのかわりと言うのも変だが、岩手県に居た安倍頼良は宮城県に行つてまで新国主の出迎えをしなかったであろう。何とかして合戦に持ち込みたい源氏軍は、それを口実にしようとしたところに恩赦の知らせが来たのである。そうなるも鎮守府將軍の肩書きを持たない頼義は強制手段を用いることが出来ない。大部分の史書には陸奥守・源頼義の着任と大赦の知らせとが同時であるように書いてある。実にタイミングが良い。

此の場合に東北地方の「平和の使者」となった上東門院とは、紫式部が源氏物語を書きながら身近に仕えた藤原彰子のことである。藤原道長の娘で一条天皇の中宮となり後一条、後朱雀両天皇を生んだ。

当代の後冷泉天皇には祖母になり、叔母にもなる女性である。さらに摂政関白・藤原頼道の妹でもあるからこの人が大病を患ったことで朝廷では大騒ぎになり、それが治ったので、奥州で安倍氏が威張るうが、出羽でナマハゲが暴れようがどうでも良くなつた。合戦さえ起きなければ放つて置きたいのである。その頃、藤原頼道は宇治の平等院を建てていたから、

そちらも気になる。

源頼義が陸奥守になる前には安倍頼良が都に攻め上つてくるような噂であつたから、政府も無理をして高値で随意契約をしたのだが、問題が無いとなれば他の国主と同じである。頼義は前売券を売り切つた後に出番が無くなつた歌舞伎役者のように一人で見得を切るしかない。なお、当時は六十歳代であつた上東門院は恩赦を施した功德で元氣になり八十七歳まで生きた。

合戦好きで国司の着任で一悶着（もんちやく）を覚悟していた安倍頼良も、謀反の嫌疑が晴れたから拗ねている理由はない。それでも、あれこれと言いつつ報告をするのが面倒であるから服従する態度を表わすとして国司様に似たような名前の「頼良」を「頼時」に改めた。改名だけで済めば安いものである。安倍頼時への対応を巡つて国府役人と源氏の幹部とが「許す」か「許さない」か議論をしたらしいが、これこそ政治献金や災害対策を議論する国会のようなもので、時間の無駄である。既に朝廷が恩赦を決めているから勝手に安倍氏を討つ訳にはいかず、許す他は無い。こうして陸奥国に合戦が無くなつた。庶民には結構なことだが、請け負つた内容に「軍事費」も含まれていた源頼義にしてみれば、平穩無事に任務が終了したのでは減額される恐れも出てきた。

取り敢えず都に働きかけて二年目に念願の鎮守府將軍の職を兼ねさせて貰つた。後は安倍氏以下、地元の人々が行政に対して不服を言うか、ストライキでもしてくれれば「反逆」として鎮守府の軍勢を動かすことが出来る。しかし辛抱強い古来の日本民族はジツと我慢の子で通した。

天喜四年（一〇五六）の七月中旬に、任期満了を前

にした陸奥守兼鎮守府將軍・源頼義は数十日間を鎮守府で過ごした。鎮守府は胆沢（いさむ）城に置かれており、言うまでも無くその地域は安倍頼良が管轄する六郡の中心地になる。此の時に安倍頼良は何処かの国で聞く話のように「誠心誠意、將軍様にサービスした」と、どの史書にも書いてある。名馬、金銀が献じられ、家来まで過分のお土産を貰つたようである。源頼義は大満足で無事に任務を果たし、懐かしい鎌倉へ帰つてゆく……というのが普通の筋書きなのであるが、それでは一般のサラリーマンの定年退職と同じになり、朝廷から懇願されて荒れる奥州の鎮定に来た源氏の武将としては平凡な経歴になつてしまふ。

当時は京の都から琵琶湖畔を北上した東山道が不破の関を過ぎ美濃、信濃、上野、下野と進んで陸奥・多賀城に達し、さらに胆沢城の先まで通じていたようであるから、鎮守府から国府へ戻る一行は、その街道を南下して行くことになる。百数十kmの行程かと思うが、一の関を越えて現在の宮城県に入った辺りで一泊することになった。その場所は「阿栗川」又は「阿久利川」とされているが地名が現存していないから正確には特定できないが、宮城県の北端、栗駒山自然公園の東部にある平野には北上川の支流が幾筋も流れているから、その付近であろう。そこで夜営をした。

日本外史には「阿栗川に宿す」としか書いてないから民家に泊まつたのか野宿したのか分らないが、頼義から五代目の頼朝時代に起こった曾我兄弟の仇討事件では幕舎が舞台になっている。百数十年前でも粗末な天幕が有つたかも知れない。一行は何組かに分かれて阿栗川に宿営地を展開していた。その夜に不可解な事件が起こつた。陸奥守である源頼義に

従っていた権守（こんのかみ副知事）の息子二人が襲われたのである。権守は藤原説貞（ふじわらのときさだ）という。早くから陸奥国に土着していた官僚である。襲撃された状況については二説あり「幕舎が襲われた」のか「外出中に襲われた」のかはつきりしないが、幕舎だと曾我兄弟の時のように大騒ぎになる筈のところ、頼義は後から事件を知つたらしいから外出中が真実に近い―この場合、真実とは言つても事件そのものが一〇〇%眉唾であるからどちらでも良いのだが；で、嘘の中でも信頼度が高い？「前太平記」に依れば天喜四年八月二十六日の午後十一時頃に、藤原説貞の息子二人が將軍のお供に遅れたので急いで街道を上つてきた。主従で百四十八騎と妙に正確なのも怪しいが、暗がりの中で行く手を塞ぐ数百人の軍勢があつた。

それを見て家来たちが騒ぐので、弟の藤原次郎元貞が馬を進め「我ら兄弟に対して怨みを持ち仇（あだ）をせんとする者は此の国に居らぬ筈だが！斯く言うは権守の次男・次郎元貞である。街道を塞ぐは何者ぞ、名乗れ！」と大声で呼んだ。相手は答えず一斉に矢を射かけてきた。これで元貞の家来が何人か倒された。怒つた元貞と兄の光貞は「名乗らぬ奴は武士ではあるまい。衣装欲しさの野盗であろう、蹴散らせ！」と一気に攻め込んだ。相手は徒歩の者が主体であつたから、駆け込んでくる騎馬に恐れて、忽ちにして逃げ去りいずこかへ消えてしまった。

この出来事は「猿蟹合戦」を大袈裟にした程度の事件であるから陸奥国司で鎮守府將軍という重職にある大物が出しゃばってくるほどの大事では無いのだが、藤原光貞から報告を受けた源頼義は自分のことのように関心を持ち「相手は誰であるか？」をしつこく訊ねた。暗闇で待ち伏せして逃げ去つた敵で

あり、騎馬武者が居らず、徒歩部隊なので盗賊の類らしいけれども、武士が夜盗に襲われて死者を出したとなると評判が落ちる。誰かを犯人にしないと攻められた自分が不利になるので、光貞は何の証拠もなしに思い付きで阿倍頼時の後継者である阿倍貞任（あへのさだとし）の名を挙げた。その理由は先年のことだが美人の評判が高かつた光貞の妹に貞任から「妻に」と言う申し出があり光貞が断つた。理由を「家柄の違い」安倍氏を卑しい家系」としたので、貞任は恨みに思つているに違いない―という憶測である。これは何の証拠も無い悪意の「嘘」なのだが、聞いた將軍様は真偽を確かめようとせず、なぜか自分のことのように怒りだして、直ちに安倍貞任を処罰しようと出頭命令を出した。

コーヒーフライク

ダイエットメガネ

菅原茂美

こんなもの世の中にあるのか？と思つたら、まじめな話。ある種の眼鏡をかけて、小さな食べ物を大きく見せると、普通は満足感を得ない量でも十分満足感を得、ダイエットに役立つのだそうだ。開発したのは東大の広瀬通孝教授。お菓子など手に持つと、手の大きさは変わらず、持ったお菓子だけが大きく見える。ビデオカメラ連動の眼鏡は、物の大きさを0.67倍から1.5倍に変動できる。メガネをかけた男女12人にクッキーを満足するまで食べさせると、1.5倍に見える場合、眼鏡をかけていない時より、9.3%も量が減り、逆に0.67倍に見える場合は、かけていない場合に比べ、1.5倍も量が増えたという。（出典：2012/4/4 読売新聞）

【風の談話室】

日々移ろいは早く、年々の移ろいは振り返るとゆつくりと感じられるものである。日々はやらなければならぬことが山積みにあるものだから終わるのがあつたという間で、1日が40時間もあればいいと思つたりするのであるが、その1日を足跡として365日を一束にまとめて振り返ると何とも歩みの遅く感じられるものである。こんなに必死に走つて来たのに未だ6年にしかならないの、と思つてしまふ。

この会報をスタートして本号で満6年、通巻72号となつた。日々のせわしなさから思つても20年も経つたかと思いたいほどである。

この編集だつて、つい昨日に4月号を作つたはずなのにといった感覚である。

しかし、振り返ればまだ6年ではあるけれど、ずいぶん多くの人達との交流を作ることが出来たなという感慨もある。この調子で100号に届いたときにはもつと嬉しい愉快が沢山出てくるのだろうと思つてゐる。

先月号で、陸平をヨイシヨする会の市川様より投稿いただいた「ついに太陽をとらえた」という詩を掲載させていただいたが、嬉しい反響をいくついただいた。

市川様の詩を読んで、自分が確りと生きてゐるのであれば、自分の喜怒哀楽はハッキリ大声で主張しなければいけないと改めて自分自身に言い聞かせることが出来た。

「怒りを込めて振り返れ」

久しぶりの大した愉快を思つことが出来た。市川様には大いなる感謝である。

《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

客演ありがとうございました 柏木久美子

ことば座の皆さん、4月8日の美浦バレエ同好会の発表会に客演いただきありがとうございました。

美浦村中央公民館大ホールの舞台はいかがでしたか。子どもは苦手だというヒロ爺にはさぞうろたさく感じる場面もあったかと思いますが、子どもたちとは2度目の共演ですから顔見しりですし、初めて会った子どもたちともすぐに打ち解けて、練習やりハーサル共にごやかにすすめてくださいました。あらためてお礼申し上げます。

舞台では、照明が入ると一層映えて効果的でした。ギター文化館での音響効果の素晴らしい場所での定期公演も魅力ですが、舞台空間一杯に踊るのも動きが大きくなった小林さんには良い経験だったかなと思いました。

今回のもう一人のゲスト、ピアニストの山本光さんとの練習も良い経験になりました。組曲「くさみ割り人形」より5曲子どもたちが踊りました。そしてピアノソロ演奏で陸平ラブソディ、イタリア奇想曲を演奏してくださいました。6月のことば座の定期公演には一緒に共演させていただきます。

ことば座と知り合い、生演奏で即興的に踊る経験が私の中でとても重要な契機となりました。前回の公演で共演した、オカリナ奏者の野口さんとの練習の時に会話した、「音楽の神様が降りてくるんだよ」という言葉が決しておおげさでなく、な

にかが変わり、生れてくるのです。この経験はもつと踊りたいという意欲につながっていききました。練習を通してさまざまなインスピレーションやとくめきを感じながら作品づくりができればとても幸せです。

母の涙

田島早苗

国民感情はお構いなく、山積する重要課題を尻目に、党利党略に明け暮れ、重箱の隅をつつくように、大臣の揚げ足取りに夢中になっている今の政局のように、不安定な気候の中で、パット咲いてパット散ってしまった今年の桜だったが、放射能の不安を抱えながらもやはり桜の季節は心が浮き立つ。人生の大切な節目として卒業式、入学式、そして社会人への第一歩を踏み出した感激も、桜と一对の忘れられない記憶として残ることだろう。我が家でも、孫の大学合格祝いに親族が集まり、大鯛の刺身を真ん中に和やかな酒宴が行われた。祝い事に出るのは当たり前になっている鯛を見る度、食べる度に思い出す一つの風景がある。

それは、戦況も段々厳しくなってきた昭和十八年の春頃だったと思うが、食糧難で何時も腹を空かせていた子供達の前に、何処かでお祝い事があったのか、父が折り詰めを料理を持ち帰ってきたのだった。どんな料理が入っていたか全く覚えていないが、折り箱の中央にでんと収まっていた鯛のことは忘れられない。国民学校六年生の兄、四年生の私、二年生の妹三人の目が鯛に釘付けになった。台所の片づけをしていた母も子供達の歓声に、のぞき込んで笑顔を見せていた。

けれど乳飲み子だった妹を負んぶして台所仕事をしている母のことは皆の念頭から消え去り、三人の子供と父親は夢中で鯛をつつき始めた。割に大振りだった鯛はあつという間に食べ尽くされ、前掛けで手を拭き拭き母がやって来たときには、跡形もなかった。

「アツ！ 母さんの分」と気が付いたときは後の祭りだった。その時、母がポロポロ涙をこぼしたのだ。生意気盛りの私は、「母親のくせに鯛が食べたくて泣くなんて」と心の奥で呟いていた。他のことはすべて忘れてしまったのに、その時の母の涙が、鯛を見る度に、何故か後ろめたい思いと一緒に蘇ってくる。

自分も人の子の母になって初めて、あの時の母の涙が理解出来た。母は、鯛が食べたくて泣いたのでは無く、母親のことを少しも思ってくれなかった子供達の心、乳飲み子を抱えた妻への優しさに欠けた夫の気持ちが寂しくて、思わず涙を零したに違いない。

「欲しがりません、勝までは」を合言葉に日本中が耐乏生活を強いられていた当時、食べ盛りの三人の子供と乳飲み子を抱えた母の苦労は並大抵の物ではなかった。満足に食べられず、母乳が出ないため、重湯を作って飲ませていた母、長女の私は精一杯役に立ちたいと、赤ちゃんのお襦袢の取り換えや、襦袢洗い、重湯を飲ませる手伝い等をしていたのに、思い掛けないご馳走を見て、自分だけの欲望に取り憑かれてしまった。私の胸の奥にあの時の母の涙が消えない傷として残ったように、母の心にもあの時の悲しみが甦ることがあったのだろうか。とうとう聞きそびれてしまった。

明治三十九年生まれ之母は高等女学校を出ているのが唯一の自慢だった。しかし母が一九才の時、優しかった母親が亡くなり、厳格な父の元を飛び出してしまった母は、母親が病気の時付き添い看護婦をしてくれた人の世話で看護婦になったという。

母の機嫌の良いときに聞かされる昔の思い出話が好きだった。

「インテリ看護婦と言つてもたんだよ」

懐かしそうな母の顔を見ながら、どんなロマンスがあつたのだろうか、おませな私の想像は果てしなく膨らむのだった。

欲望の固まりに振り回される日常から解放され、人生の最後を迎えるときに残るのは食欲と情欲だけだという。長く病院生活を送っていた母が意識の混沌とした中で「**先生がどうしても結婚してくれと言つて困つてしまう」と言つたり、絶えず口を動かして物を食べるしぐさを繰り返していた姿が思い出される。雨の金曜日の春愁は果てもない。

会報を編集して何が一番愉しいのかといえば、執筆者の人達と勝手な会話が楽しめる事である。何時も印刷日ギリギリの編集になるのであるが、全員原稿を読ませてもらつたことになる。

PCのデータで書く人の原稿も、唯書式に貼り付けるといつわけにもいかないもので、一通り読ませただけ。

皆さんがそれぞれに、勝手な思いといつと矢張り言ひ方になるかも知れないけれど、基本的には文章表現とは、勝手な思いや言ひ分を書くのであるから、編集者としては否応なくその文章と対話し

なければならなくなる。

実はそれが愉快なのである。特に、この「ふるさと風」では、個人の勝手のないものは歓迎されないで、皆さんそれぞれに方向は違つが確りと自分の勝手（考え・思い）を書かれてるので編集者にはその分文章との対話が多くなるのである。

《ことば座だより》

6月公演の脚本から…

白井啓治

6月公演の脚本が漸く書き上がり、関係者の方々に渡すことが出来た。脚本のタイトル、内容は既に決まつており、ポスターやチラシにはその旨が広報されている。

「将門伝説 苜萱姫（むくらひめ）物語」と題したギター文化館発・常世の国恋物語第三十話である。一応三十話の記念公演的な意味合いのあるものであるが、この物語の発想の切っ掛けは、今回も共演をお願いするモダンダンスの柏木久美子さんから、ホルストが伊藤道郎のために作曲したという「日本組曲」の事を聞いたのが始まりであった。

以前より、平将門をテーマに何かを書きたいと思つていたのであったが、風の会の打田昇三さんが「歴史の嘘」をテーマに長編作品を執筆しているのがあるが、その中に将門の話が書かれてあり、小生の頭の中にかなり具体的な構想が生まれ始めたのであった。

作品構築の縁というのは面白いもので、この四月の第一日曜日に、柏木さんの指導する美浦村と土浦の同好会の発表に、ことば座で何かお願いし

たいといわれており、出来れば美浦村に係る演目があればうれしいのですが、と言われ、美浦村の伝承物語を渡されたのであった。

発表会には美浦村の話は作れなかったのであるが、お借りした伝承物語の中に将門の側室であった苜萱姫の話が出ており、それが今回三十話の恋物語となる引き金になったのであった。

出来ればホルストの日本組曲にある旋律を引用して能の様式などを取り入れてコンテンポラリー舞踏劇にできたらと考えてみたのであった。

将門の乱を記す「将門記」などには「…いささか女論に依りて舅甥（おじおじ）のなか既に相違う」などと記されており、何か幻想的な恋物語を創作する予感のようなものを感じていたのであったが、美浦村の伝承物語によって実現することが出来た。伝承物語の地が大須賀津であったことから「朧なる湖上の月に思ひの映して今宵は花に酔うて舞い惚ぶ」と発想してみたのであった。この紙に脚本の全てを紹介するには紙面が足りないため、今回は将門と苜萱姫の舞う詩について幾つかを紹介してみたいと思う。

将門の舞（1）

『人の世は しばし旅居の仮り枕

命の永久になかりせば しばし旅居の仮り枕

仮りの枕に欲の積めど

明日の夜明けの見るは難し

明日の夜明けの見るは難し

人の世は ただただ春の夜の夢

ただただ春の夜の夢

おこれる者もたけき者も

時の波間の流木に縋るもついには沈みけり
朧なる湖上の月を映しみて

君思うことこそ真なれ
君思うことこそ真なれ

苺萱姫の舞 (1)

『耳を澄ませて聞いてごらん

まだ夜明けには遠く

波は月の薄明かりを照らしている

ひっそりかんとして

ゆっくりとうねっている

油を引いた水面

漁師達は逞しい肩に銚と網を担ぎ

ゆらゆらと舟に乗りこんでいく

そして漕ぎ出していった

誰一人声を話す者はいない

舟を打つ波音だけが声している』

苺萱姫の舞 (4)

『見て！ 私の事を

聞いて！ 私の心を

あまりにも大きな絶望

私は黙って絶望を飲み込むことは出来ません

その絶望はあまりにも大きすぎる絶望だから

あなたは生きろ！ という

貴方の命を

私の命を継げという

今この湖は静かです

でも、きつとどこかで波は大きくなって

私の小舟をバラバラに打ち砕くでしょう

それでも貴方は私に言うでしょう

その荒波にも打ち勝って命を継げと

波打ち際には

貴方の心臓の鼓動が生きていた

朧な月の明かりは

あなたの優しい瞳のため息

岸辺には心臓の鼓動が力強くドラムを打つ

月の明かりはあくまでも物憂く朧』

苺萱姫の舞 (5)

『あなたの偉大なるたくらみを

誰も知らなかった

誰も知ろうとはしなかった

しかし

あなたは説得しようなんてことは考えなかった

あなたはそれを企みだとは思ってはいなかった

それは、当然の帰結のことなのだから

腐敗しきったこの世の仕組みをかえるためには

説得は無意味で無駄な事で

力で倒す以外の方法はないとあなたは思っていました

あなたは都の腐敗を知っていました

だから、

腐敗には力を持って圧倒する以外

最良の方法はないことを知っていたのです』

将門と苺萱姫の舞

『この世には情熱の法則があります。

法則にかなわない情熱はすぐに冷めて、

凍りついて、

粉々に砕け散ってしまいます。

あなたの情熱は法則よりも早く、

そして熱く走り出してしまったものだから

法則があなたに追いついていくことが出来な

かったのです。

あなたは

情熱の法則を破ったではありません。

法則があなたに

付いていくことが出来なかったのです。

でも私は、あなたが走り来る先で

あなたの激しく熱い情熱が

走り抜けてくるのを待っています。

あなたは情熱という波

あなたは情熱という風

あなたは情熱という月の明かり

真夏の太陽の風

真冬の暗闇の風

熱い情熱と凍える情熱が交差する十字路で

暗闇と太陽の光が交差する十字路で

二人は躊躇った』

今回の舞台では、音楽をピアニストの山本光さんをお願いしており、今まではまた違う舞台を楽しんでいただけたものと思っております。

風の談話室では、色々な方やグループの話しを載せていきたいと思っております。お気軽に投稿ください。

(C)KAZE

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

石岡市柴間ギター文化館発「ことば座」第23回定期公演

「常世の国の恋物語百」第30話

さくら
平将門伝説 苺萱姫物語

2012年6月15日～17日（14時30分会場 15時開演）

ホルストが伊藤道郎のために作曲した「日本組曲」を主題として、太古には日高見国と呼ばれていた常陸国信太郡に伝わる伝承物語を軸に、常世の国の恋物語として、手話舞の**小林幸枝**とモダンダンスの**柏木久美子**の共演によるコンテンポラリー舞踏劇として構築。

平将門の亡霊の告白にきく承平の乱の真実と苺萱姫への思い、そしてまだ見ぬわが子への願いを**小林幸枝**が手話の舞いに舞う。

苺萱姫の将門を慕い偲ぶ女の心と将門の果たし得なかった思いを子守唄の中に託して子に伝える母の心をモダンダンスの**柏木久美子**が、朧なる湖上の月に思いの映して、宵の花に酔うて舞い偲ぶ。

今回**柏木久美子**は、**山本光**のピアノ演奏に乗って苺萱姫の魂の声を舞います

脚本：演出 **白井 啓治**

舞台背景画 **兼平ちえこ**

舞台装美 **小林 一男**

(出演)

朗読：**しらみひろぢ**

舞技：**小林 幸枝**

柏木久美子

音楽：**山本 光** (ピアノ)

○**柏木久美子**が**伊藤道郎**を偲んで、**ミチオナンバー**を
ギター文化館の円形ホールに再現します。

御期待下さい!!

入場料…3,000円（小中学生1,500円 ギター文化館 0299-46-2457 で取扱っております）

ことば座